

奄美大島視察の旅(2018.11.21~23)

奄美大島に行ってきた。なぜこんな時期にと思われるかもしれないが、ある団体から誘われ、一度も行ったことがないし、めったにない機会だと思い便乗することにしたのだ。いきなりのお誘いだったので、奄美についてほとんど知識がない。思いつくのは、美しい海に象徴される自然、台風の通り道、サトウキビ(黒糖・黒糖焼酎)、アマミノクロウサギ、ハブくらいだ。

一応知識を仕入れようとネットで Wikipedia を覗いてみたら、鹿児島県に属し、島の面積が 712.35 km² で本州など 4 島を除くと佐渡島に次ぐ広さで、人口も約 6 万人、そのうち中心部の奄美市名瀬周辺に 3 分の 2 の 4 万人強が居住とのこと。島には奄美市(2006 年名瀬市、笠利町、住用村が合併)、奄美市に挟まれた龍郷町と南部にある瀬戸内町、あと東シナ海側の大和村と宇検村の 1 市 2 町 2 村で構成されているようだ。

I 羽田発⇒奄美北部⇒ホテル「ネストアット奄美ビーチヴィラ」

羽田空港を 12:00 に出発した JAL659 便は、ほぼ予定通り 14:30 頃無事に海に突っ込むような感じで奄美空港に到着。現在、空港は海沿いの国立公園内にあるが、もともとは 1964 年 6 月から 2km 南の今奄美パークがあるところに位置していた。しかしながら、滑走路の用地が確保できないため新たに建設され、1988 年から供用されている。JAL のほか 4 年前から LCC のバニラ・エアが成田と関西空港から、2018 年 8 月からスカイマークが中部国際空港発鹿児島経由で運行している。このように LCC の乗り入れが多くなってきたことから、観光客は増え始めているようだ。

空港では「しまバス」が待機、1 日目の観光が始まる。ガイドは、奄美観光グランドマスター認定の美人で声もきれいな大久保由美子さんだ。空港から北へ向かい、すぐのところにある奄美北部の海水浴場で、よくポスターにも使われる通称「ブルーエンジェル」土盛(ともしり)海岸を散策。



ちょうど晴れてきたので海の色もコバルトブルーで、本当にきれい。途中、奄美固有の植物、アダン(タコの木)がパイナップルのような黄色い

実をつけている様や、里芋に似た葉を持ち観葉植物としても利用されるクワズイモや、本当に可愛い琉球コスミレを紹介された。因みに「クワズイモ」はその名の通り「食わず芋」で、毒性が強く食べられないし、切り口から出る汁も触らない方が良さらしい。



続いてさらに少し北へ行くと、そこは奄美十景の一つである「あやまる岬展望台」。270°の展望で地球が丸く見えるし、太平洋の東側に開けているので日の出を1年中見ることができるそうだ。展望台から下を見ると、海岸の手前に広々とした「あやまる観光公園」（遊園地？）がある。ここには、サンゴ礁を削りぬいた海水プールや大



人も子供も利用できる遊具もあり、一日中楽しめそうだ。あやまる岬展望台の駐車場には、みしょらん CAFÉというカフェがあり、特に濃厚なソフトクリームが評判とのこと。（筆者は食べそびれた）



また、このあやまる岬の「あやまる」の由来だが、謝罪の「謝る」ではなく、この岬一帯のなだらかな地形が「アヤに織られた手毬」によく似ていることから、いつの頃からか「アヤマル」と呼ばれるようになったとか。この海岸線には、モクマオウという外来種の植物が見られる。松の木に似た感じだが特に潮風に強く防風林として、オーストラリアから持ち込まれたそうだ。また亜熱帯の植物として有名

な「ソテツ（蘇鉄）」も数多くみられる。蘇る鉄と書く通り、枯れかかった時に鉄クギを打ち込むと蘇るという伝説に由来するという。1億5千年以上前地球に現れたというソテツは、オスとメスがあり、メスの綿毛のような花の中に10月～11月に赤い実を100～120個くらいつけるそうだが、その実にはサイカシンという毒が含まれており、そのままでは食用に適さない。ただ十分水に晒し、乾燥させ、それをすり潰したりして加工すれば、澱粉を取り出すことができるそうだ。



ここから空港方面に戻ると、周辺はさとうきび畑一色。森山良子の「ざわわ ざわわ …」（さとうきび畑）の音が聞こえてきそうだ。さとうきびは春植え（3～4月に植えて翌年1～3月に収穫）と夏植え（7～8月に植えて翌々年1～3月に収穫）があり、「すもも」のような花をつけるのが収穫期の目安だそうだ。奄美のさとうきびの糖度は18°と言われている。さとうきびの渡来は、江戸時代前期、奄美出身の殖産家直川智（すなお・かわち）により中国・福建省から秘かに持ち込まれた。持ち出し禁止だったものを、苗を3本衣類かごに忍ばせて持ち帰ったという。

そのまま進むと、空港周辺に近づくとレンタカーの看板がやたらと目につくようになる。LCC の観光客が増え、夏の最盛期には車が足りないくらいらしい。さらに南に向かうと、さとうきび畑の奥にタワーが見えてきた。それは高さ 20m の奄美パークの展望台で、この施設は前に書いたが、奄美空港の跡地で、2001 年 9 月に開園した。園内には「奄美の郷」という総合展示ホールやイベント広場を備えた施設や「田中一村記念美術館」がある。「奄美の郷」の展示ホールでは奄美の集落をモデル化し、実物大の模型や写真、映像等で奄美を見て知って体感してもらうもので、観光客はもちろん地元の特に次世代を担う子供たちに奄美の歴史、風習や文化を理解してもらう趣旨で構成されているという。また、「田中一村記念美術館」には昭和 33 年(1958 年)から昭和 52 年(1977 年・69 歳没)まで奄美に居住し、紬工場で染色工として働きながら、亜熱帯の植物や動物を描き続け、独自の世界をつくりあげた田中一村(放浪の画家で、南を目指したことから「日本のゴッガン」とも呼ばれる)のコレクションが展示されている。彼は、NHK の日曜美術館で「黒潮の画譜」として紹介され、一躍有名になった。(この日は休園日のため入れなかった。ー第 1 と第 3 水曜日が休園日)

さらにバスで進むと、広い道路にぶつかる。この道路が島の南北を結ぶ大動脈国道 58 号線で、ガイドさんは日本で一番長い国道だという。全員??? 実はこういうことようだ。この道路は、鹿児島県鹿児島市をスタートし種子島を南北に縦断、さらに奄美大島を南北に縦断し沖縄県那覇市が終点で、陸上部分が約 250km、海上部分が約 610km、総延長約 860km となり、日本一なのだ。なぜ、そういう



ことになるのかというと、一般国道の条件の一つに「都道府県庁所在地など、特に重要な都市を連絡する道路」というのがあり、また海上でも、「道路と道路を結ぶ 1 本の交通経路」があれば良いということが理由みたいだ。



国道 58 号を北に少し進むと、そこは龍郷町赤尾木地区。そこにあるカトリック赤尾木教会の庭に、ガジュマルの巨木がある。確かに複雑に絡み合った幹は何とも言えずグロテスク。この木の特徴は、幹が多数分岐して繁茂し、その囲いから褐色の気根を地面に向けて垂らす。垂れ下がった気根は、徐々に幹に絡みついたり、地面に着くと新たに根を張り、これがさらに太くなり幹のようになるという繰り返して複雑な異様な姿になるという。別名「締め殺しの木」とも言われるそうだ。

また、この名の由来は、幹や気根が「絡まる」が訛ったという説や、「風を守る」⇒「かぜまもる」⇒「ガジュマル」という説もある。確かに、海岸線沿いに防風林代わりに植樹されていたらしい。

II ホテル「ネストアット奄美ビーチヴィラ」

ここから今日宿泊するホテルに向かうが、右手に広がる赤尾木湾には星窪伝説というのがあるそうだ。直径 3.2km 周囲約 10km の赤尾木湾は、奄美クレーターとも呼ばれ、氷河期以前に隕石が落ちてできた湾だといわれている。少し進むと「ネイティブシー奄美」の看板がみえてくる。このホテルは、われわれが視察・宿泊する「ネストアット奄美ビーチヴィラ」の奥にあり、修学旅行者がダイビングやシュノーケリングの訓練で訪れるところだそうだ。ガイドの O さん曰く、「ネストアット奄美ビーチヴィラ」と明日泊まる「THE SCENE」は奄美大島の中で最高級ホテルといわれ地元の人ほとんど泊まれない。せいぜいランチを食べに行くくらいだとのこと。「ネストアット奄美ビーチヴィラ」は奄美出身の建築家山下保博氏の設計で、彼はテレビ番組の「ビフォーアフター」



の中で、『夫婦は千葉市内に 1900 万円で土地を購入。ここに新しく家を建てるため妻が大ファンだという山下氏に設計を依頼した。妻は「目立つ珍しい家。外観が度肝抜いて個性的な芸術作品に住みたい」と希望。これを受け、山下氏は、土で出来たブロックで家を造ることに決める。廃棄処分する際に簡単に土に帰ることから「土ほど環境にやさしい素材はない」のだという。』 <http://www.officiallyjd.com/archives/63432/> というような主張でさらに脚光を浴びることになる。ほかにも彼は、鹿児島県シラス台地のシラスをコンクリートに加えて利用するという環境にもやさしいシラスコンクリートの建築で世界的な賞を受賞したとのこと。 やっと、ホテルに到着。

レストランでウェルカムドリンクをいただきながら、㈱ネストアット奄美ゼネラルマネージャーの近藤哲氏よりこのホテルの生い立ちや概要について説明を受ける。グランドオープンは今(2018年4月)、100%外資・シンガポール資本で、オ



ナーの奥様が奄美出身の日本人。10数年前から年に1~2度、オーナーと共に奄美大島に訪れ、いつかは島の自然・文化・歴史等を生かして、ここにホテルを建てたいという夢をあたためていた。2025年までには、鹿児島から沖縄にいたる日本の南国にアジア圏の富裕層の方々が滞在できる施設が不可欠と感じていたところ、バニラ・エアやスカイマークといったLCCが近年就航したことで、遅れていたインフラが改善してきたことから、時期が到来したと判断した。ただ、この島は土地がほとんど個人所有で不動産マーケットが存在しないため、土地の入手には苦労したが、オーナーの奥様が奄美出身であったことが幸いし、実現の運びとなったという。

今年の4月にグランドオープンし、どれだけ集客できるかは1年目ということであまり期待していなかったが、この島にミドルからアッパークラスのホテルが少ないということもあり、ほぼ満室状態でオーナーからもみんなの「Blood & Sweat」の結晶だとビックリされた。来年2019年もGWや夏の予約は、ほぼ満杯の状態とのこと。奄美大島といってもどこ？と言われていくくらいではだめで、どのようにこの島をアピールしていこうか考えている。沖縄のような低地リゾートとの違いを



アピール、海の自然はもとより通年楽しんでもらえるような四季・文化といった里山的な「なつかしさ」を切り口にコンセプトを考えた。それは、「島の新しい集落」で、文化財等を活かしながら、今後さまざまな面白さやユニークさを育て、発信していくことだと言う。



このホテルは、隕石が落ちてできたといわれる赤尾木湾に面しており、建物はコテッジ風の平屋建てが13棟(26室)とレストラン棟からなっている。内3棟(3室)はプールヴィラ、5棟(10室)がオーシャンヴィラ、残り5棟(10室)がスタンダードヴィラで構成されている。設計は、前にも書いたが奄美出身の山下保博氏《アトリエ天工人(てくと)》で施工は地元の業者。ちょうど自衛隊基地の建設工事と重なり、

職人集めに苦労した。設計コンセプトは、①奄美の昔ながらの風景や環境を大切に ②伝統的な形状や自然界から発想した形態と奄美素材の開発による外観 ③奄美にないプライベートプール付きの高級リゾートで、建物は奄美で採れる「夜光貝」の形状をイメージするとともに、木造建築の屋根材は大島紬の泥染めの工法で仕上げた奄美原産の椎



の木の板材を使用したとのこと。レストラン棟と宿泊棟の高低差が大きいが、ゴルフ場のカートのようなもので送迎している。集客は、OTAは楽天・一休で自社の比率も高い。インバウンドは、今のところ少ないが、ヨーロッパ・アメリカ・台湾の客が来ている。海外からというよりも日本に住んでいる外国人が、沖縄は混んで

いて気に入らないというような客層だ。連泊は最大14泊の方がいるが、連泊するような方はどこかに行くというより、釣りを楽しんだり部屋で読書をしたりと癒しを求める方が多いような気がする。ホテルスタッフは現在35名であるが、なかなか求人は厳しい。清掃等は外部委託と半々、リネンは外部にせざるを得ない状態で、スタッフにはマルチタスク方式をとってもらっている。一人3タスクくらいだ。スタッフには、飽きないでよいと好評だ。もちろんそれなりの処遇はしているのでモチベーションは高いと言う。

プールヴィラの中を見学。広さは約55㎡の平屋建てで4名定員、間取りはリビング・ベッドルーム、和室、水回り(バス・トイレ・洗面所)、小さいプール付きの広いデッキテラスとなっている。デッキテラスでは波の音が心地よい。天井が高く開放感があるのと、木材が使用されているので、なんとなく温かみがあり居心地が良い。眺望はデッキテラス(デッキチェア備え付け)からはもちろんリビング・ベッドルーム、バスからも、美しい海の色が見える。玄関先には、観葉植物がわりのクワズイモが植えられている。

一度レストラン棟に戻り、それぞれの部屋に案内される。部屋までは、ゴルフカート仕様の車で運んでもらう。オーシャンヴィラが割り当てられた。やはり玄関先にはクワズイモ。先ほどのプールヴィラとの違いは、約37㎡の広さと間取りでは和室がなく、デッキテラスが小さい。プールはないが、代わりに小さな露天風呂がある。温泉ではないそうだが、これに浸かりながら波の音を聞くなんてなんとロマンチックだろう。



Ⅲ 奄美の中心・名瀬と郷土料理・島唄の「吟亭」

今日の夕食兼懇親会は、視察も兼ねて奄美市名瀬の「吟亭」。奄美の郷土料理と島唄のライブが楽しめるそうだ。ガイドのOさんに案内してもらいながら向かう。名瀬は奄美大島の中心で、小中高の学校、病院、合同庁舎、新聞社さらに最近はイオン、ヤマダ電機、洋服の青山等有名大型店舗もまとまって進出していることから「コンパクトシティ」と言われているそうだ。

少し進むと国道 58 号線・赤尾木に入る。その村はずれに、大島紬村がある。大島紬は、1300 年前に開発されたもので、裏表の区別がなく軽い織物として有名で、結城紬、塩沢紬とともに日本三大紬と言われている。また、この染色技法が古来独特であることから、フランス・ゴブラン織り(タペストリー)、ペルシャ絨毯とともに世界三大織物の一つに数えられているのだ。その染色技法とは、絹糸を 4 月頃梅に似た白い花を咲かせるテーチ木(車輪梅)のチップを煮出した汁(タンニン酸)に漬け込み、さらに鉄分を含む泥田に漬け込む。これを何回も繰り返し、黒褐色になるまで続けると大島紬独特の色に染まる。染まり具合が悪くなると、泥田にソテツの葉を入れ、鉄分を補給するという。これは、2017 年 3 月 9 日に NHK で放映された「プラタモリ」でも、「奄美の宝」のひとつとして紹介されているんだ。

この奄美には、平家落人伝説もある。浦上町には、平有盛を祀った有盛神社、龍郷町戸口には平行盛を祀った行盛神社、加計呂麻島の諸鈍には平資盛を祀った大屯(おおちよん)神社がある。(付録②参照)

9 月 30 日に襲来した台風 24 号で飛ばされた名瀬港のシンボルであった赤灯台の横を通過、現在は LED を使った仮灯火でしのいでいるという。いよいよ名瀬の街の歓楽街の中心「屋仁川通り」通称「やんご通り」に入る。ここには約 200 軒の飲食店があり、鹿児島県では鹿児島市の天文館通に次ぐ規模といわれている。因みに「やんご」とは奄美の遊里のことだそうだ。ガイドの O さん曰く、「この「やんご通り」には蛇のハブより毒性の強い「姫ハブ」がうようよしているのでご注意ください！」とのこと。

いよいよこの通りに面している「吟亭」に到着。予約席は、島唄ライブのかぶりつきの席だ。席に座ると、もうすでに「吟亭」特製のシマ料理が並べてある。細長いお皿に付出しなのか、「島もずく」「島の車エビ」「とびんにゃ(マガキ貝)」がある。「とびんにゃ」とは潮が引いたとき砂地を貝が備えている爪のようなものでびよんびよん跳ぶことに由来しているとのこと。他には、お造り、

つきあげ(さつま揚げ)を生節とピーナツと味噌で和えたもの、ハンダマ(ワカメに見えるが金時草という植物)の胡麻和え、黒豚骨と野菜の炊き合わせ、油ソーメンがコース料理。ピーナツと胡麻は隣の喜界島産で、ほとんど地産地消なのだが、昆布とソーメンだけは他県から取り寄せとなっている。昆布は北海道の日高昆布、ソーメンは阿波の半田ソーメンだそう。



いよいよ島唄のライブが開始。女の子が二人出てきた。本来であれば、この店の女将で奄美を代表する唄者の松山美枝子さんが登場するそうだが、今日は公用で不在のため、彼女が主催している「島唄教室」の愛弟子である、高1の「ことのちゃん」と中1の「かほちゃん」のライブになるそう。全国大会にも出場しているくらいのレベルとのこと。「ことのちゃん」が三線の担当。最初に披露してくれたのが、うたげの始まりを告げる「朝花節」で、皆さんに良いことがありますようにと願う唄だそう。続いて「よいすら節」、「かほちゃん」のチジン(島太鼓)も加わり、「あらーへいよーほ」の掛け声が入る「イトウ」、その後も抒情的な恋歌「らんかん橋節」、《奄美から外に行くには海を渡らなければいけない。見送る側としても旅立つ側としても、行かなければならないけど、行きたくはないのよ》という「行きゅんにや加那」と続き、6曲目に「宝島唄」。これが、一気に盛り上がる唄で、自然と手拍子がでてくるようなリズムカルな曲なのだ。その後、客にも一緒に楽しんでもらおうという趣向なのか、「島育ち」(田畑義夫・1962年(昭和37年))と「島のブルース」(三沢あけみと和田弘とマヒナスターズ・1963年(昭和38年))を一緒に歌ったり踊ったり、最後に定番である「六調」でお開きとなった。「六調」とは、唄者・三線・チジン(島太鼓)・ハト(指笛)・踊り手・掛け声が合わさってできる調べであることから名づけられたものだそう。この「吟亭」はさすがに奄美名瀬・屋仁川通りを代表する店だけあって、料理良しライブ良しと楽しませてくれる点で行ってみる価値はありそう。

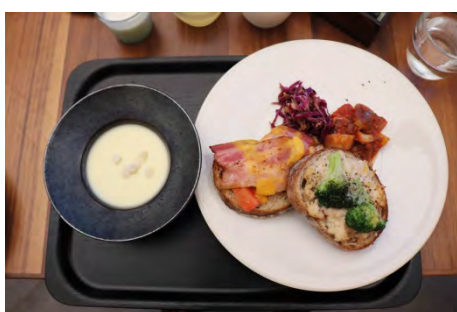


お店を出たのが、21時前ごろだが、わがグループの大半の方々は、これ

から野生動物観察ミッドナイトツアー <http://nighttouramami.amamin.jp/e623679.html> に出掛けるという。筆者は、体力面も考慮し遠慮したので、そのままホテルに直帰。雨が降り始めたので、ミッドナイトツアーの方々が心配だったが、部屋の鍵を受け取り部屋に入る。オーシャンヴィラなので、さすがに波の音が心地よい。

IV ホテル⇒奄美中部⇒奄美野生動物保護センター

いよいよ2日目の始まりだ。6時に起床し、朝食を食べにレストランに向かう。レストランまで、かなり登りの道を歩かなければならない(頼めばゴルフカートで迎えに来てくれたのかなとも思ったが・・・)ので、荷物持参で行くことにした。朝っぱらから、二度も上り下りするのは大変だからね。朝食は、野菜サラダ、スープ、ベーコンとチーズ&ブロッコリーとツナが乗ったフランスパンとジュース・牛乳・コーヒーの飲物だ。朝早いのでちょうど良い加減だ。二杯目のコーヒーを飲ん



でいるところで出発の時間になった。まだ少し雨模様だ。食事をしながら、野生動物観察ミッドナイトツアー参加者から聞いたところによると、「アマミノクロウサギ」が2匹、「アマミシカワガエル」が1匹横切るのを見ることができたとのこと。「ハブ」には会わなかったようだ。ホテルには12時前に着いたらしいが、ツアー観察中はほとんど雨に降られなかったとのこと。このようなツアー

で、動物に出会えるかどうかは、天候や運とガイドの良し悪しで決まるそうだ。ガイドさん同士も、お客さんの取り合いで大変らしい。

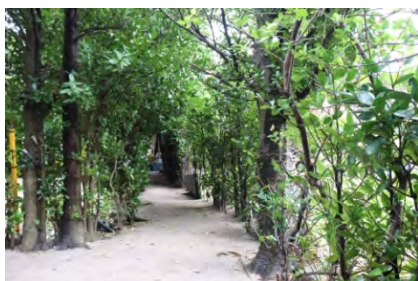
今日は、細い道に入るので大型バスは無理なため、ジャンボタクシーをチャーターしている。すこし窮屈だがやむを得ないよね。島の中部をいくつか見学し、南に向かうコースだ。最初の予定では、東シナ海に面した国直海岸に向かう。国道58号線を進んでしばらくすると、急にタクシーの運ちゃんが車を止める。何かと思ったら、そこは奄美特産の黒糖の製造工場「水間黒糖製造工場」だった。製造過程を見せてもらえるというので、全員下車。建物の周りにサトウキビの茎が並べてあり、建物の中では一面湯気が立ち上っている。サトウキビのしぼり汁を加熱して水を蒸発させ、そこに食用石灰を入れて固まらせて作るのだと言う。出来上がったばかりのところに行けば、熱々のデキタテの黒糖が賞味できたらしいが、今日のところは無理みたい。お土産に、1袋(350円)購入。大島紬のところでも書いたが、黒糖も大島紬と共に「奄美の宝」なのだと、「プラタモリ」で紹介されていた。タモリさんたち一行もこの工場に立ち寄って熱々の黒糖を食べたそうだ。



再び、国道 58 号線を進み、名瀬から県道 79 号線(東シナ海ライン)に入って目的地に向かっていくと、また運ちゃんが車を止める。きれいな海や半島の眺めが望める高台の場所だ。いきなり「西郷どん」を観ているかと聞く。ここは、大和村の宮古崎の入り口で、宮古崎は「西郷どん」のオープニング映像のラストに映されている場所だそうだ。テレビで放映されるまであまり知られていなかった観光地だが、放映されてからは地元のしまんちゅが訪れるツウな海岸線と言われている。この駐車スペースから遊歩道を徒歩で 20 分だが、奄美の自然を肌で感じられるスポットだとか。

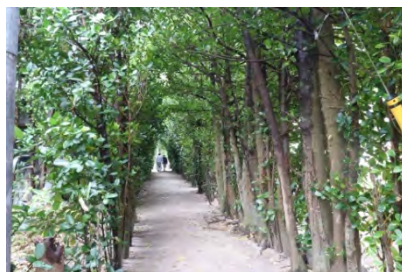


ここから国直海岸はすぐだ。波も静かできれいな海岸で夏のシーズン(6~9 月)には海水浴客であふれ、近くには民宿や食堂もあるようだ。この集落は、家屋を台風から守るため防風林を植樹した。沖縄からフク木という木がもたらされ、防風林や防火林、家屋の境界線として植えられたそうだ。成長が早く高く伸びる性質があり、特にこの国直集落のフク木は貴重な景観を見せてくれていると言う。砂地のフク木の並木を歩くと気持ちが良い。フク木は、「福をもたらず木」なのだ。



国直海岸をあとに奄美野生動物保護センター <http://amami-wcc.net/introduction> へと向かう。しかし、運ちゃんがその入り口を通り越してしまう。近くに是非見てもらいたいものがあるという。

タクシーが止まったところの表示板には、群倉(ぼれぐら)とあり、そこにはカヤ葺のへんてこな建物が建っている。これは、奄美独自の高床式倉庫の高倉というもので、この高倉の集まりを通称群倉と呼ぶらしい。ここに建てられている解説の看板によると、この建物の特徴は建築史上変わり種と言われ、①金釘を 1 本も使用していない。②柱はかんなで削り上げているので足掛かりがなく[ねずみ]が登れない。③風通しがよいので[貯蔵物]の保ちがよい。④大風ときは揺れるけども倒れにくい。⑤火災のときは下部の貫木をはずすと容易に倒すことができる。とある。また、この建築様式は、[南島雑話伝説]や[おもろ双紙]にもしるされているくらい相当古く、八丈島にもよく似



タクシーが止まったところの表示板には、群倉(ぼれぐら)と

あり、そこにはカヤ葺のへんてこな建物が建っている。これは、奄美独自の高床式倉庫の高倉というもので、この高倉の集まりを通称群倉と呼ぶらしい。ここに建てられている解説の看板によると、この建物の特徴は建築史上変わり種と言われ、①金釘を 1 本も使用していない。②柱



はかんなで削り上げているので足掛かりがなく[ねずみ]が登れない。③風通しがよいので[貯蔵物]の保ちがよい。④大風ときは揺れるけども倒れにくい。⑤火災のときは下部の貫木をはずすと容易に倒すことができる。とある。また、この建築様式は、[南島雑話伝説]や[おもろ双紙]にもしるされているくらい相当古く、八丈島にもよく似

たものがあるそうで、黒潮文化圏として南洋から伝来したものらしい。この大和浜の群倉は、人家から離れて火事の災害から逃れ、耕地近くの作業場としての使用と収穫物の運搬収納に近い場所としてというような農家の生活の知恵から生まれたものと言われ、現在5棟残存、県指定有形文化財だそうだ。実際によく見ると、屋根裏に格納庫がある。

道も話もそれてしまったが、いよいよ目の前に見える奄美野生動物保護センターに向かう。センターで迎えてくれたのは、環境省 奄美自然保護官事務所 主席自然保護官の二神紀彦さんだ。

今日、このセンターでの解説と金作原原生林のガイドを引き受けてもらうことになっている。因みに、センターの役割は、主に①保護増殖事業、②普及啓発活動、③マングース防除事業だという。

①は、種の保存法(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律)では、国内に生息・生育する絶滅のおそれのある種を国内希少野生動植物種に指定し、特に優先度の高い種について保護増殖事業を行う。このセンターでは、アマミノクロウサギ、アマミヤマシギ、オオトラツ

グミの保護増殖活動を行っている。個体数のモニタリングや繁殖生態の解明をはじめ、各種の調査・研究に取り組むことで、これらの種と取り巻く環境を注意深く見守り、奄美群島の生物多様性が守られる環境作りを進めていると



いう。②は、パンフレットの作成や小中学校での授業、自然観察会の開催などを通して、奄美群島の生きものや自然の大切さを知ってもらう活動を行っている。(パンフレットは多岐にわたったものがある。)③は、外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)で特定外来生物に指定されているファイリマングースの防除を勧めている。その中心を担うのが「奄美マングースバスターズ」。センターでは、バスターズや関係者と協力・連携しながら、奄美大島からマングースを完全に排除する取り組みを行う。なぜ、マングースかというと、もともと1979年にハブを退治するため、わざわざ海外から持ち込まれ、名瀬の赤崎公園で30頭が放たれたそうだ。しかしながら、マングースはハブを退治するどころか、在来生物を食べたりや農作物を荒らしたりしながら個体数を増やし、固有種に壊滅的なダメージを与えてしまったのだ。そのため、2005年に専門チームの「奄美マングースバスターズ」を結成し、駆除を始めたという。マングースが生息しそうな場所に3万個以上の罠を仕掛け、マングース探索犬とともにバスターズの人が

ちが巡回するという地道な活動を行った結果、最大約 1 万頭以上いたといわれたのが、2018 年は推定個体数 50 頭以下と推定され、今のところ捕獲数 0 と成果を上げているそうだ。このことにより、アマミノクロウサギ等の固有種が増え始めているという。



まず、企画展示室で、「奄美大島ってどんなところなのか」という 15 分程度のビデオを鑑賞。奄美大島を、ユーラシア大陸と陸続

きだったものが切り離されてできた島だという生い立ちから、春夏秋冬の自然のありさまや動植物の生態の映像により、知ることができた。この後、二神さんから企画展示室の掲示物の説明や調査研究コーナーでの展示物の解説等をしてもらった。その解説の中で、びっくりしたことがある。「アマミノクロウサギ」の生態系を脅かす問題としてマンガースの駆除を上げたが、それ以外にも森林伐採により住処を失ってしまうこと、交通事故(特に夜間)によるもの、さらにびっくりさせられたのが、野イヌ・野ネコによる被害だという。飼い主から捨てられた犬や猫(ネズミ対策で飼われた)が野生化し、アマミノクロウサギや希少なネズミやカエルを食べてしまうというような事例があるのだ。従って、センターでは、夜間に運転することや犬や猫を捨てないよう注意喚起をしているとのこと。そのため、ペットには身元証明になるマイクロチップを装着させたり不妊去勢をさせる運動も行っている。

このほかにも、センターではこの奄美大島を世界自然遺産にしようとする運動に協力している。このことは鹿児島県のホームページに詳しく掲載されているので、ご参照を。

<https://www.pref.kagoshima.jp/ad13/kurashi-kankyo/kankyo/amami/amami-isan.html>

この動きの中で、法律的に自然景観を守っていくため平成 29 年(2017 年)3 月に日本で 34 番目の国立公園「奄美群島国立公園」が誕生した。この国立公園が従来の国立公園と違うところは、他は自然景観を守るために指定されたのだが、この奄美では風景だけでなく生物の多様性が評価され、従って生態系の管理も含めた保護(センターの役割)が必要とされていると言う。こうして、世界自然遺産へのバックアップ体制ができたと思ったら、今年(平成 30 年(2018 年)5 月)にユネスコの諮問機関(IUCN: 国際自然保護連合)から登録延期が適当との勧告を受けてしまったそうだ。世界自然遺産として登録されるための条件は、下記サイト上にある通り非常に厳しいようなのだ。

https://www.env.go.jp/council/12nature/y120-33/mat02_1.pdf#search=%27E5%A5%84%E7%BE%8E%E5%A4%A7%E5%B3%B6+%E4%B8%96%E7%95%8C%E8%87%AA%E7%84%B6%E9%81%BA%E7%94%A3%27

それでも、政府は、「奄美大島、徳之島、沖縄北部及び西表島」を平成 30 年度の推薦候補としたそうだ。2020 年秋には「登録」になる見通しだということなので、応援していきたいね。

V 奄美野生動物保護センター⇒金作原生林

奄美野生動物保護センターを後にし、センターの二神さんを案内人をお願いし、名瀬の山中奥に位置する原生林、金作原(きんさくばる)原生林に向かう。県道から標識に従ってジャンボタクシーでしばらく進むと、舗装はされているもののすれ違いができない道に入る。道理で、昨日乗ったバスでなく、ジャンボタクシーを選んだわけだ。さらに進むと、駐車スペースがある分岐に到着。そこから歩くのかと冷や冷やしたが、そこからは舗装がされていない凸凹の砂利道を進むことになる。轍があり車の腹をこすりながら、また樹木に車体をこすったりしながら、車も乗っている人間も大変だ。レンタカーショップが、金作原生林への乗り入れを禁止しているのもうなずける。やっと原生林散策コースの入口に到着したが、すでにお尻や腰が痛い。雨は降っていないが、曇っていて何となくじめっとした感じ。往復約1時間のコースを、二神さんの解説付きで出発。散策路は、思っていたより広い平坦ではあるが、一歩間違えば崖から転落の危険もあるし、森の中にいきなり入りこめば、ハブと遭遇することもあるので、要注意だとのこと。歩きはじめると、やはり亜熱帯の森なので、シダの仲間が多いように思われる。ガイドの説明の中で、木の上に植物が生えることがあるという。何かというと、亜熱帯では雨が多く湿度も高いので、違う植物が、木から栄養分をもらう寄生ではなく、ただくっついて生えている着生と呼ばれる



ものだそうだ。さらに約15分程度進むと、この原生林のメインイベントである「ヒカゲヘゴ」の登場だ。「ヒカゲヘゴ」はヘゴの一種で、奄美大島以南に自生する大型の常緑木性シダで、高さが10mを超えるものもある日本最大のシダ植物。約3億年以上前から存在しているとされ、生きた化石とも呼ばれるそう。天に傘をさしているような大きな葉の広がりを見下ろすのは何とも言えない気分だ。ずっと上を見上げながら歩いていると、崖から落ちそうになるので、ここでも特に注意が必要だ。今日は曇っているが、晴れて空の青さと、「ヒカゲヘゴ」の葉のコントラストが見られれば感激すること請け合いた。因みに、新芽は80cm程度に成長したものが食用に適し、

茹でて灰汁抜きをした後に天ぷらや酢の物にして、また芯は煮込むとダイコンのような食感で食することが可能だとのこと。さらに進んで、ガイドの二村さんが指を差すところを見ると変な T 字型の管が設置してある。これが、マングースバスターズが設置したマングース捕獲用の罠なのだ。想像していたより小さいものだ。我々の折り返し地点から少し階段を下りると、そこには、樹齢 150 年以上、高さが約 22m、胸高直径が約 1.0mもある奄美大島最大の「オキナワウラジロガシ(ブナ科)」がある。このように大木になると、根が板状に張り出す板根(ばんこん)が見られるそうだ。ここから同じ道を再び「ヒカゲヘゴ」のジャングルを抜け、鳥のさえずりを聞きながら原生林の入口まで散策。二神さんは、鳴き声で鳥の種類が分かるそうだ。

